

四旬節第三主日 2017.3.19

サマリアの女

ヨハネ福音書 4章 5-42 節

(そのとき、イエスは、) ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。

サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」

イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。

「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。あなたには五人の夫がいた

が、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」女は言った。「主よ、」「あなたは預言者だとお見受けします。わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。

さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるように頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたち

は自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」

説教

キリストの黄泉下りは死者への福音告知だったという解釈があります。

主は聖霊によって宿り、おとめマリヤから生まれ、ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちからよみがえり、天に昇られました。（使徒信条から引用）

金曜日に十字架につけられたイエスは金・土の二日間は黄泉（死者の国）に下って死者たちに福音を説き、三日目の日曜日に蘇った、よみがえりまでの金・土の二日間は死者への福音告知だったという解釈です。どういう理由なのかわたしは知らないのですが、最近はこの説明をする教会の牧師、神父さんは少ないようです。

<二日間のサマリア滞在>

ヨハネの福音書にはほかの福音書にはない特徴があります。よく数字がでてくるのです。きょうの福音でもサマリアに二日間とどまったということが記録されています。なぜ二日なのでしょう。

さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、——洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちである——ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。しかし、サマリアを通らねばならなかった。4:1-4

きょうの福音朗読の直前の4章1-4節にイエスがサマリアを訪れた理由が書いてあります。当時はエルサレムからガリラヤに行くにはサマリアを避ける道を通るのが普通だったようです。ユダヤ人とサマリア人には宗教上にも因縁があって双方とも互いを避けあっていたようです。しかし、福音書には「サマリアを通らねばならなかった」と強調しています。

そして、エルサレムからガリラヤへの旅の途中にイエスは二日間サマリアに滞在した。このサマリア滞在の日数はイエス復活の暗示、比喩になっているという読み方があります。「死んで黄泉にくだり三日目に死人のうちから蘇り…

（使徒信条）」エルサレムを追われてサマリアにくだり二日とどまり、三日目にガリラヤに行くという行程をヨハネ福音ではイエス復活にたとえているのではないか。そうだとすると使徒信条の死者への福音告知とイエスのサマリア伝道はこの黄泉下りの期間「二日間」に相当します。

＜霊と霊の対話＞

イエスとサマリアの女との対話は深い真理を含んでいます。ヨハネ福音書は出来事の背後にいろいろな意味が隠されている神秘的な福音書という特徴があります。

ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。 4:27

先週の福音ではイエスの変容を目撃したペトロは小屋を建てましょうといったのですが、きょうのテキストで弟子たちはなにも言わなかった、とわざわざ彼らの質問例まであげて誰も何も質問しなかったことが記されています。これを注釈では、弟子たちはイエスが女性としゃべっているのに驚いて何もいえなかったと説明します。なぜなら当時のユダヤ社会では女性と二人きりでしゃべるということは不道徳、性的というより女性差別にもとづく、とされていて、ましてラビ（宗教指導者）が・・・という感覚があったからだと説明します。これに基づいて、弟子たちはまず驚いたけれど、よほどの事情があるのだろうと察して無言だったのだという解釈です。

でもイエスの弟子のなかには女性も多くいたし、弟子たちといっしょにイエスの伝道旅行に同行していました。イエスが女性と会話しているので驚いたというのは強引な解釈のような気がします。いろいろ調べていたらウルトラ解釈というか「とんでも解釈」がありました。このサマリアの女は霊体・幽霊という解釈です。弟子たちの無言の訳は声はすれども姿は見えない状態だった、ペトロはおっかなくなっただけで何も言えなかった、つまり女は霊のから

だだったという解釈です。先週の福音に登場したモーセとエリアもイエスの時代には生きていない人、いってみればみれば霊体です。ペトロたちは先週は霊は見えていたけれど、今週のサマリアの女は見えなかった。

井戸といえば幽霊がつきものです。一枚二枚と皿を数えながら井戸の中から恨めしやー、って登場する日本では有名な幽霊もいます。わたしはこのサマリアの女=霊のからだという解釈がとても気になります。サマリアの女が霊であるとしてきょうの福音を読み返してみるとごちゃごちゃした背景（5回も離婚したとか、真昼間に井戸水を汲みに来るとか）やイエスと女が交わす礼拝に関する難しそうな神学論争もすーっ とわかる。サマリアの女が霊体だったとするとイエスが語る霊のレベルの話、わたしが与える水⇒聖霊⇒永遠のいのち、が理屈ではなくわかってくるように思います。イエスを信じるということは霊を信じるということでもあるのだなあ、とおもいます。どうぞ皆さんもあとで「女=霊体・幽霊」という視点でもう一度きょうの福音を読み返し、聖書の神秘にふれ、味わってみてください。主に感謝、そしてみなさまの上に主の平和がありますように。